

『マンガ嫌韓流』の

こしが デタラメ

姜 誠 / 太田修
朴 一 / 鄭夏美
鄭雅英 / 吳文淑
総谷智雄 / 藤永壯
半月城 / 高吉美

第9話

竹島＝独島の知られざる歴史

半月城

『マンガ嫌韓流』(以下『嫌韓流』)において、竹島トクトⅡ独島を日本領とする根拠がたった二点しか記述されていないのは特筆に値する。それはわずか二コマで説明されている。その分量といい内容といい、マンガとはいえあまりにも説明不足である。残りのマンガは、すべて韓国に対する非難にあてられ、さらに、付録の竹島Ⅱ独島問題を解説する下條正男氏の文章にいたっては、竹島Ⅱ独島を日本領とする根拠がほとんど記されていない。「名は体を表す」の格言どおり、『嫌韓流』は題名にふさわしく、史実究明よりも嫌韓をおおることに重点をおいているようだ。

こうした姿勢では、竹島Ⅱ独島問題をきちんと理解することは困難である。『嫌韓流』が書いた内容がいかに我田引水的であるかを、日本史関係と韓国史関係に分けて具体的にみることにする。

—【日本史の資料から】—

江戸幕府は竹島Ⅱ独島をほとんど知らなかった

江戸時代、現在の竹島Ⅱ独島は松島、そして鬱陵島ウルルンドは竹島と呼ばれた。それにしたがって、

ここでは島の呼び名を松島、竹島とする。

当時の松島(現在の竹島Ⅱ独島)は、その名前に反して松の木はおろか、樹木は一本もなかった。それにもかかわらず松島と呼ばれたのは、松島が竹島の付属島、あるいは一対であるとの考えからである。この事実は重要で、のちに詳述するが、明治政府もそう考えて松島・竹島を日本の版図外とする指令を出した。そのことにふれる前に、まず江戸時代の歴史をみることにする。

『嫌韓流』は松島を日本領とする江戸時代の根拠を二〇四ページのマンガで表現した。そこでは、「幕府は竹島(旧名松島)については日本の領土とさえ渡航を禁じてはいなかった」と書いているが、これは正しくない。

江戸幕府は松島を日本領と考えなかったばかりか、当時は松島の存在自体をほとんど知らなかった。実際、元禄時代(一六八八年～一七〇四年)に竹島(現在の鬱陵島)をめぐる朝鮮との領土交渉「竹島一件」(二二六ページ参照)が起きた時、幕府は実情把握のため鳥取藩に「竹島の他に両国へ付属する島はあるか?」との質問書を出したほどであった。文中の両国とは鳥取藩が支配する因幡国・伯耆国を指す。幕府は、異例の渡海申請があった竹島を知てはいても、松島をほとんど知らなかったのである。

それも無理のないことだ。幕府の地図に、竹島や松島は記載されていなかったからであ